

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

祖父の家の机には、いつも一本の万年筆が置いてあった。黒い軸に、金色の細い線が一本入っている。子どものころ、私はそれをさわらせてもらえなかった。「これはおじいちゃんの仕事の道具だから。」祖父はそう言って、引き出しにしまった。

祖父は長いあいだ、町の小さな印刷所で働いていた。人の書いた文字を、機械で刷る仕事だ。「人の字を刷るのが仕事なのに、自分の字は下手でね。」祖父はよく笑いながら言った。それでも、手紙はいつも万年筆で書いていた。中学に入った春、祖父が入院した。見舞いに行くと、祖父は私に、あの万年筆を差し出した。

「もう、手が震えて書けんから。」

私は受け取れなかった。受け取ってしまえば、祖父がもう手紙を書かないと認めることになる気がした。「退院したら、また使うでしょう。」私がそう言うのと、祖父は少し黙ってから、万年筆を枕もとに置いた。

夏の終わりに、祖父は退院した。手の震えは残ったが、元気にはなった。私は、あの万年筆のことを、それきり口にしながらった。

秋になって、私は学校の作文で賞をもらった。祖父に見せに行くと、祖父は作文を読み終えてから、引き出しを開けた。出てきたのは、あの万年筆だった。

「これで、名前を書いてみなさい。」

私は、作文の表紙の名前の横に、もう一度自分の名前を書いた。ペン先が紙をひっかく音がした。字は、少し曲がった。

「下手だな。」祖父は笑った。「おじいちゃんに似た。」

私は、万年筆をそのまま持って帰った。今度は、受け取れた。祖父が渡したかったのは、書けなくなった道具ではなく、書く人を続けてほしいという気持ちだったのだと、その時になって、やっと分かったからだ。

(この問題のための書き下ろし)

問一 「私は受け取れなかった」とありますが、その理由を「くから」につながらるように、本文中から四十字以内で抜き出さない。

[illegible]

問二 「祖父は少し黙ってから、万年筆を枕もとに置いた」とありますが、このときの祖父の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

私に断られて腹を立て、二度と渡すまいと決めている。

イ 私の気持ちを察して、無理に渡すのをやめ、時を待つことにしている。

ウ 退院できると言われて、すっかり安心している。

エ 万年筆をどこに置けばよいか迷っている。

問三 「私は、あの万年筆のことを、それきり口にしなかった」とありますが、その理由として最も適切なものを、次の

ア、エから一つ選びなさい。

ア 万年筆にもう興味がなくなったから。

イ 祖父が元気になったので、万年筆をもらう必要がなくなったから。

万年筆の話をする、祖父が書けなくなったことに触れてしまう気がしたから。

エ 祖父が万年筆をなくしてしまったから。

祖父が万年筆を渡すことで本当に伝えたかったものを、「私」は何だと分かりましたか。「〜という気持ち」にながるように、本文中から十五字以内で抜き出なさい。

[illegible]

問五 春には受け取れなかった万年筆を、秋には「受け取れた」のはなぜですか。「私」の変化が分かるように、五十文字以内で説明しなさい。

[illegible]